welcome to
empty colours

AKIRA FUJITA : pencil drawings “grayscale”

artwork preview
2011/01/30

『白い絵画』

僕の絵に余白が多いのは、
オブジェクトが光を浴び
呼吸するための空間を
確保しておくためだ。

オブジェクトと余白の関係は、
音符と休符の関係に似ている。

音符の連なりはメロディとなる。
音符の重なりはハーモニーとなる。

だからといって、
ただ音で埋め尽くしただけでは、
それは「音楽」にはならない。

休符はリズムとビートを生む。
休符は瞬発力と余韻を生む。

　音として聴こえる音と、
　音として聴こえない音が、
「音楽」を構成しているのだ。

僕の言いたいことは、
だいたいそういうようなことだ。

- - Empty Colours (AKIRA FUJITA) 2002年 - -

『紙の無意識』

壁のシミや天井の模様、床の汚れなど、
芸術作品のように鑑賞する対象ではなく、
本来は何の意味もないものでも、
眺めていると何かの形や風景に見えてくるという
経験をしたことはありませんか。

夜道で樹木の影が不気味な魔物に見えたり、
形を変える空の雲にさまざまな空想を重ねたり…

どうやら、ひとの眼やココロには、
たとえとらえどころのない状態の物からでも、
「何か」を見つけ出そうとする
不思議な性質があるように思われます。

鉛筆の粉で紙を汚し、それが何に見えるかを
じっと観察して行くことから描いてゆく技法を
『紙の無意識』と名付けました。

それはいわゆる抽象絵画ではなく、
自分本位の想像の世界を描いたものでもなく、
まるで、紙の中に元々埋まっていたイメージを、
鉛筆で「発掘」して行くような描き方です。

紙を汚すのに水彩鉛筆によるシミを利用する場合には、
『水の無意識』と区別して呼んでいます。

いずれも、
描き手の僕自身ですら思いも寄らなかった世界を、
紙に教えられるようにして描いて行く技法なのです。

「技法」というよりも「発想法」のようなもの
といった方が良いかもしれません。

- - Empty Colours (AKIRA FUJITA) 2007年 - -

『beautiful barbarians（麗しき野蛮人たち）』

絵を描いたり、身の回りのものに装飾を施したりすることは、生きていくために直接必要となることではないはずだ。

なのに、人類の文明の曙のころから「美術」は存在していた。

世界の先史美術には、年代や地域・風土によって、異なる点はもちろん多いのだけれど、そういった時間と空間の違いを超えて、どこか似通ったところもまた感じられる。

それは、
単に未熟な技術や貧弱な道具の制約から描写が単純化されたためによる類似ではなく、何か最初期の人類全体に共通したヴィジョンやメンタリティが存在していた可能性を感じさせられるものだ。

サルから分化して直立二足歩行を始めた時点では、まだ彼らは類人猿（ヒトに似たサル）と大差ない獣の一種だ。その彼らが、生きて行くために必死に知恵を絞り、やがて、生きて行くのには必要ではない、たとえば「美術」のようなものにまで手を伸ばしていった時...

その時こそ、
彼らが「人間らしさ」「人間性」の萌芽を獲得した時、他のどの生き物とも違う「人間」になった時であった、と言っても良いのではないだろうか。

原始の美術は、そんな「麗しき野蛮人たち」の最初の雄叫びであったのかもしれない。

- - Empty Colours (AKIRA FUJITA) 2008年 - -

「何らかの植物」シリーズ (Webサイト未掲載分)

何らかの植物 2010 April　(2010)

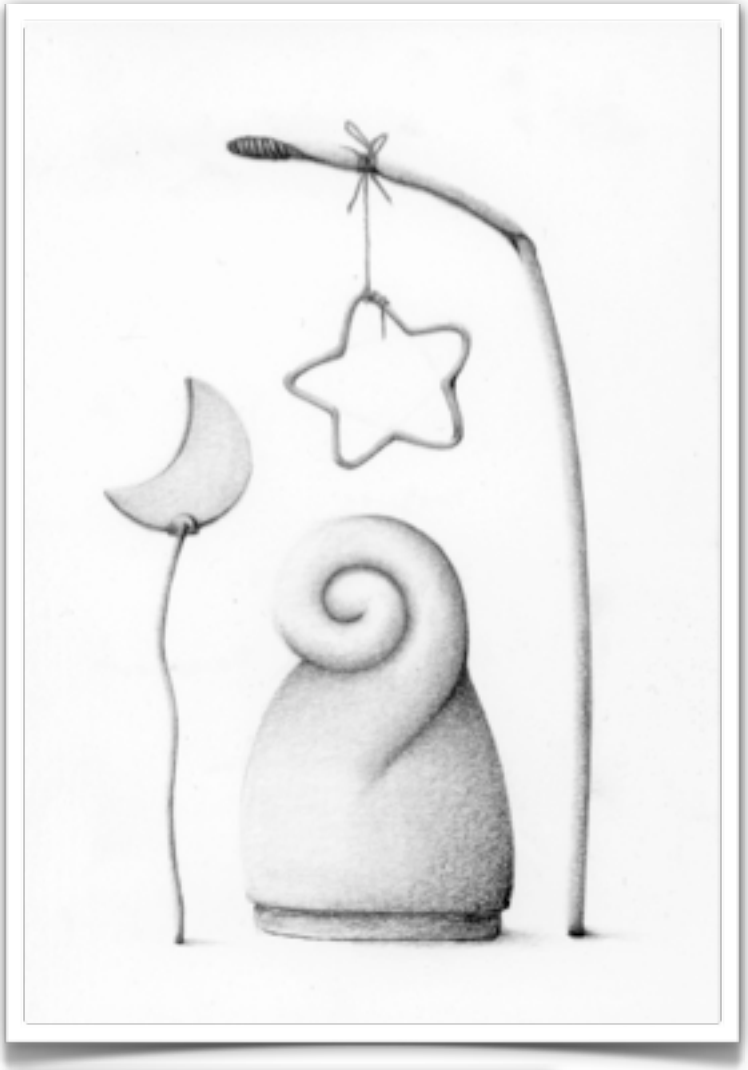
額装済：流木額（作品サイズはおよそハガキ判）
非売品〔個人蔵〕

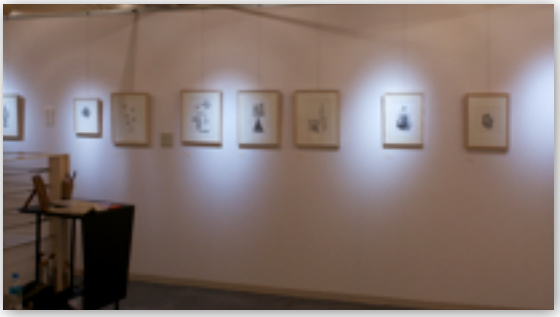
個展 “Camera Obscura"　会場風景
〔2010年5月〕
at Photo Café / Gallery Barrage (浜松市)
http://homepage.mac.com/icelt/home/info100419.html

「何らかの植物」シリーズ (Webサイト未掲載分)

何らかの植物 December　(2009)

額装済：木枠額（作品サイズはおよそハガキ判）
¥10,000



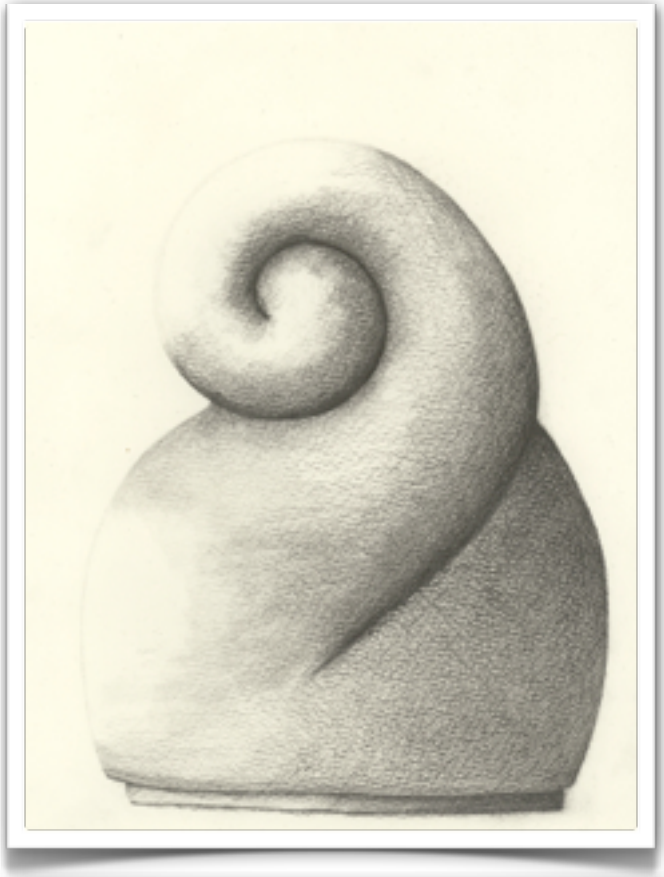


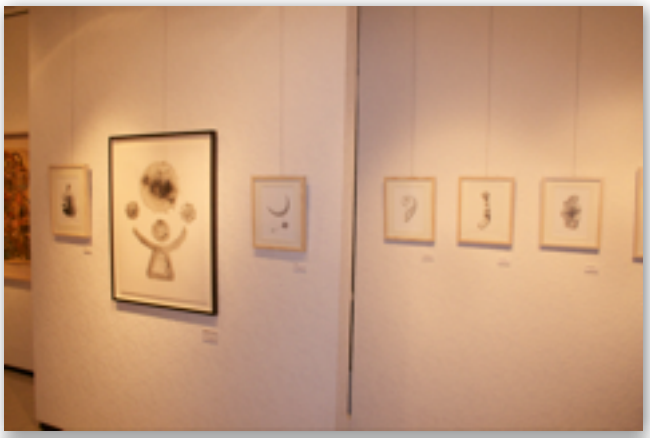
個展
"Winter Tails"　会場風景
〔2009年12月〕
at Art Age Gallery (豊橋市)
http://homepage.mac.com/icelt/home/info091115.html

「何らかの植物」シリーズ (Webサイト未掲載分)

何らかの植物 2009 Mar.　(2009)

額装済：額サイズ「八ッ(24.2x30.3mm)」or「太子(28.8x37.9mm)」判
非売品



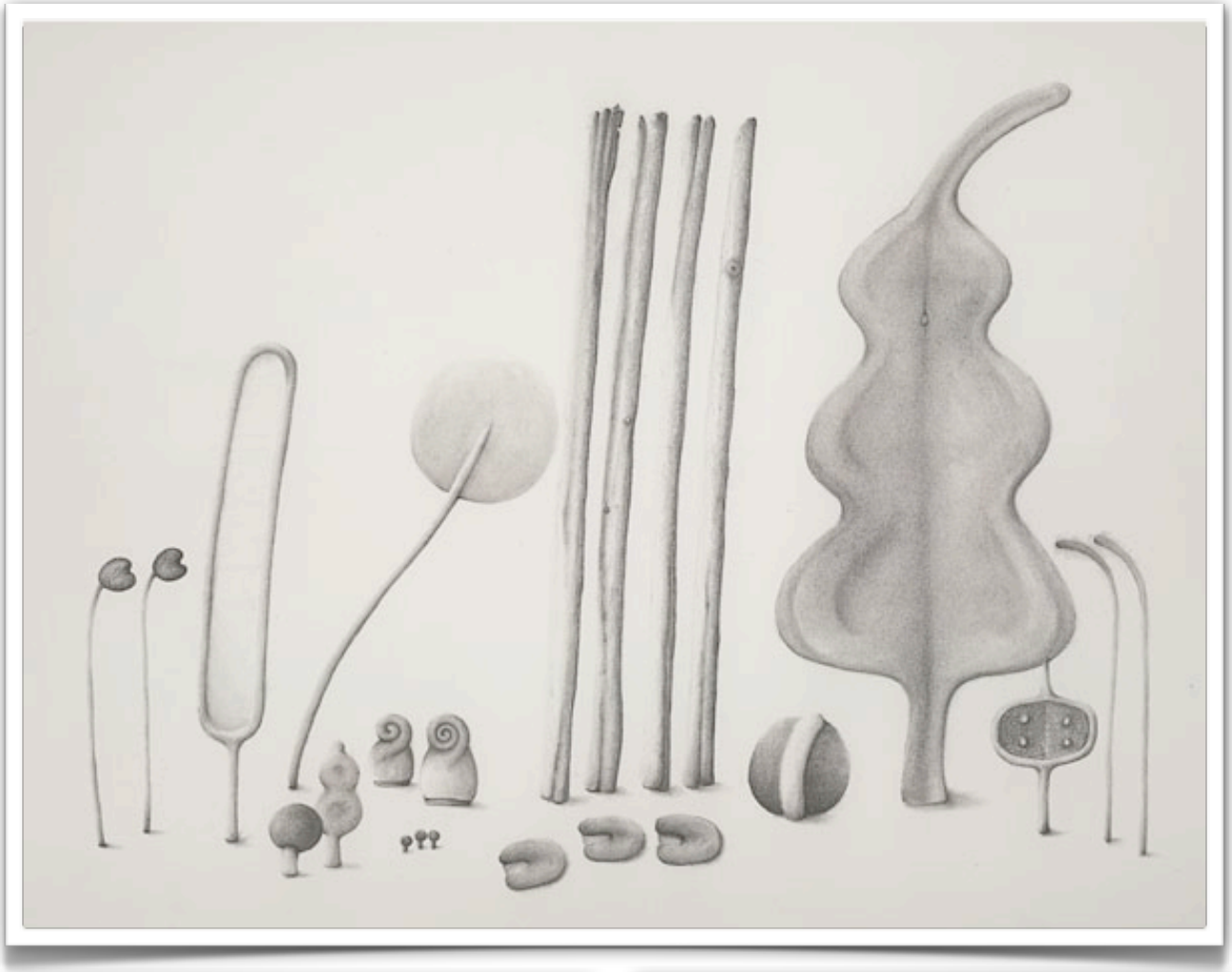


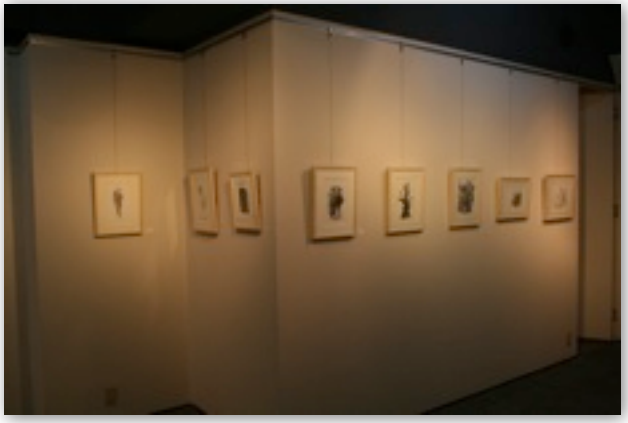
大手京子氏・大野俊治氏・鈴木敬三氏とのグループ展
「線の集積展」　会場風景
〔2009年5月〕
at ギャラリー風蘭 (浜松市)
http://homepage.mac.com/icelt/home/info090426.html

「何らかの植物」シリーズ (Webサイト未掲載分)

何らかの植物：森の集会 2008 Oct　(2008)

額装済：額サイズ「四ッ(W42.4xH34.8mm)」判
¥30,000



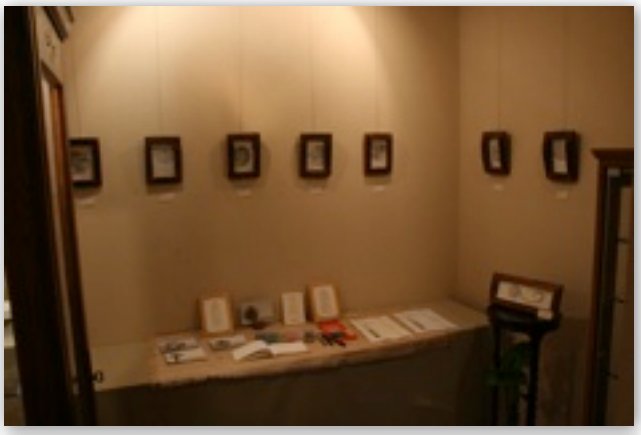


浅野高延氏・陶山傑氏・森川渉氏・森田靖久氏とのグループ展 **"カルトン展"**　会場風景
〔2008年11月〕at ギャラリー48 (豊橋市)
http://homepage.mac.com/icelt/home/info081010.html

「何らかの植物」シリーズ (Webサイト未掲載分)

何らかの植物：いっしょに　(2008)

額装済：流木額（作品サイズはおよそ写真判）
¥10,000

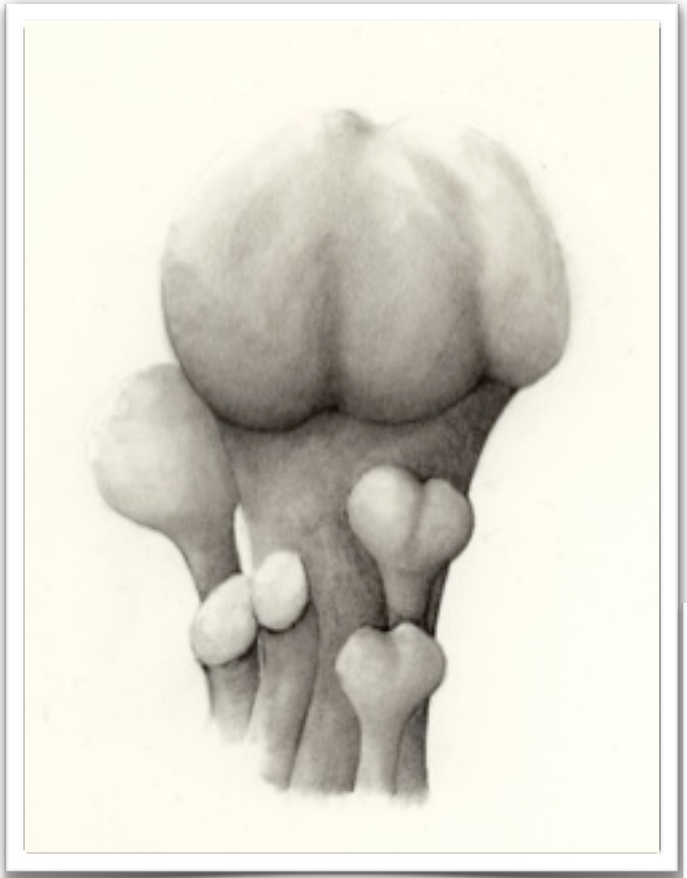


個展 “Slows Airs #2"　会場風景
〔2008年8月〕
at Café Scene (浜松市)
http://homepage.mac.com/icelt/home/info080713.html

「何らかの植物」シリーズ (Webサイト未掲載分)

何らかの植物 2008 May(1)　(2008)

額装済：額サイズ 八ッ(24.2x30.3mm)判
¥15,000



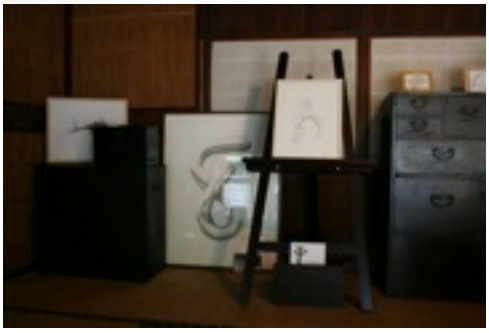
何らかの植物 2008 May(2)　(2008)

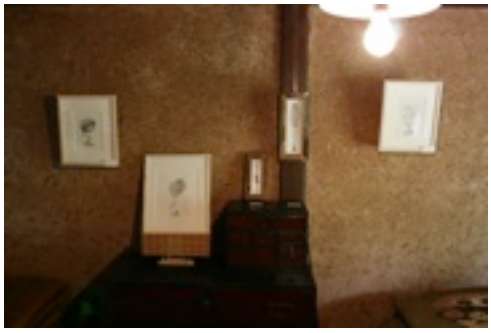
額装済：額サイズ 八ッ(24.2x30.3mm)判
¥15,000

「何らかの植物」シリーズ (Webサイト未掲載分)

何らかの植物 2008 May(3)　(2008)

額装済：四ッ(34.8x42.4)判
¥30,000



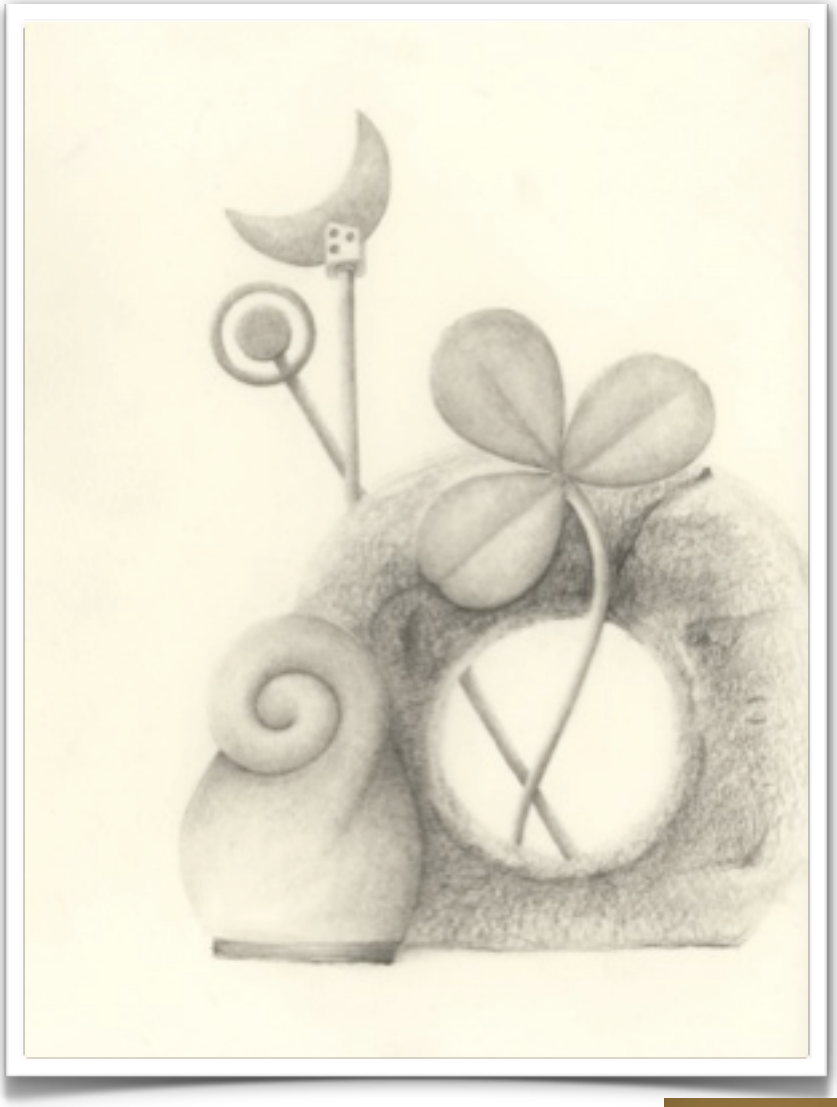


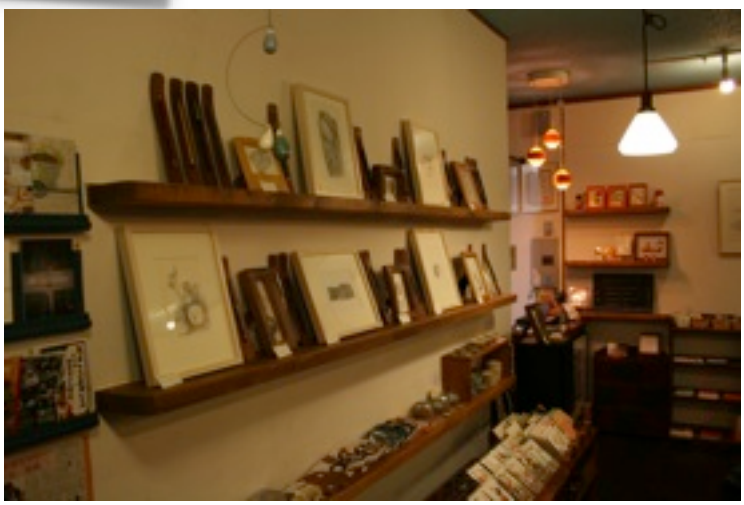
個展 "Time Machine Returns"　会場風景
〔2008年6月〕
at ギャラリー阿多古館 (浜松市・旧 天竜市)
http://homepage.mac.com/icelt/home/info080510.html

「何らかの植物」シリーズ (Webサイト未掲載分)

何らかの植物　シャムロック　(2007)

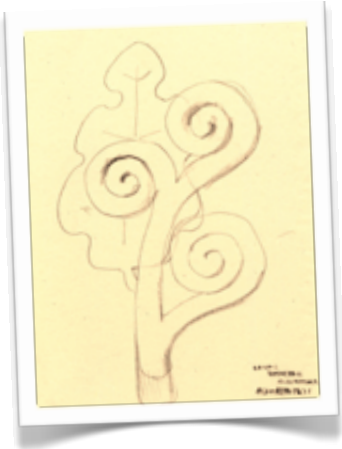
額装済：八ッ(24.2x30.3)判
〔非売品〕





個展 “hide-and-seek 3"　会場風景
〔2007年11月〕
at Café ORGA’N SON (浜松市)
http://homepage.mac.com/icelt/home/info071105.html

「何らかの植物」シリーズ (主なWebサイト掲載分)



何らかの植物A <Prototype>
(2000)　非売品

何らかの植物 <Outtake>
(2002)　非売品

何らかの植物：博物誌 I
(2003)　個人蔵

何らかの植物 博物誌 II
(2003)　個人蔵

何らかの植物 D
(2003)　ハガキサイズ4点組
¥50,000

何らかの植物 E
(2003)　ハガキサイズ4点組
¥50,000

何らかの植物 F
(2003)　個人蔵

何らかの植物 バイオプラント　窓(1)
(2005)　非売品

何らかの植物 バイオプラント 窓(2)
(2005)　非売品

「何らかの植物」シリーズ (主なWebサイト掲載分)

何らかの植物 バイオプラント
(2005)　非売品・個人蔵

何らかの植物 バイオプラント
(2005)　非売品・個人蔵

何らかの植物 バイオプラント
(2005)　非売品・個人蔵

何らかの植物 バイオプラント
(2005)　非売品

何らかの植物 バイオプラント
(2005)　非売品

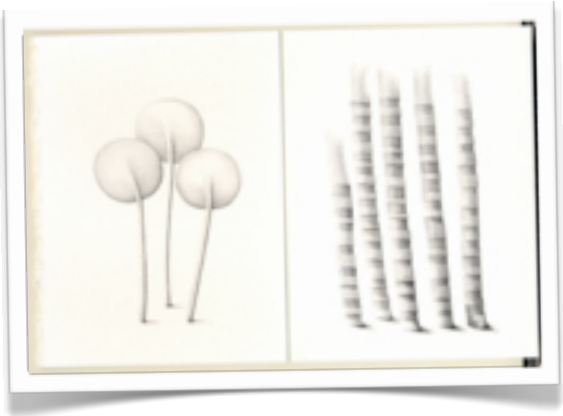
何らかの植物 バイオプラント
(2005)　非売品

「何らかの植物」シリーズ (主なWebサイト掲載分)

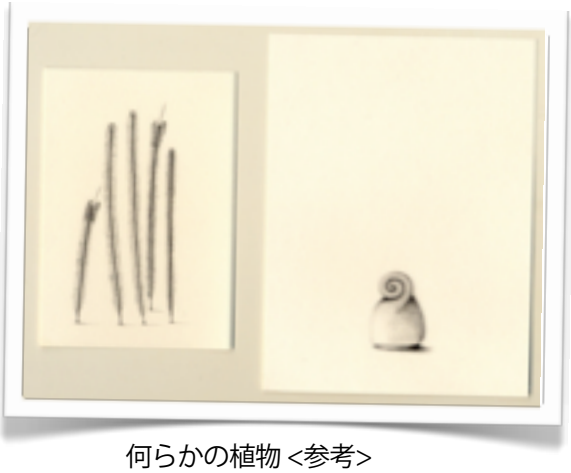
何らかの植物　(2005)
額装済：額サイズ
八ッ(24.2x30.3mm)判
¥15,000

花の咲かない植物　(2005)
額装済：額サイズ
八ッ(24.2x30.3mm)判
¥15,000

何らかの植物：邪悪な　(2005)
額装済：額サイズ 八ッ(24.2x30.3mm)判
¥15,000



何らかの植物 2005b[左]、2005a[右]　(2005)
額装済：額サイズ 八ッ(24.2x30.3mm)判
各¥15,000



何らかの植物 <参考>
(2005)　非売品

何らかの植物 <参考>
(2005)　非売品

その他の主な作品 (Web掲載済みの作品)

ポテトチップ畑でつかまえて

(2004)
額装済：額サイズ 八ッ(24.2x30.3mm)
※作品はハガキサイズが2点

その他の主な作品 (Web未掲載作品から)

鳥の巣(2)
(2007)

鳥の巣(3)
(2007)

鳥の巣(6)
(2007)

鳥を目指す玩具 2007_2
(2007)

鳥を目指す玩具 2007_3
(2007)

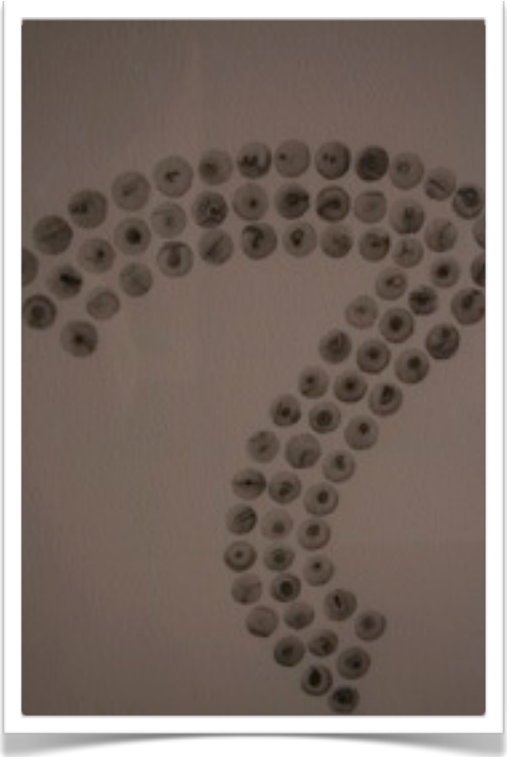
鳥を目指す玩具 2007_4
(2007)

その他の主な作品 (Web未掲載作品から)

沈没船／水中考古学_2
(2007)

ULTRAVIOLET
(2007)

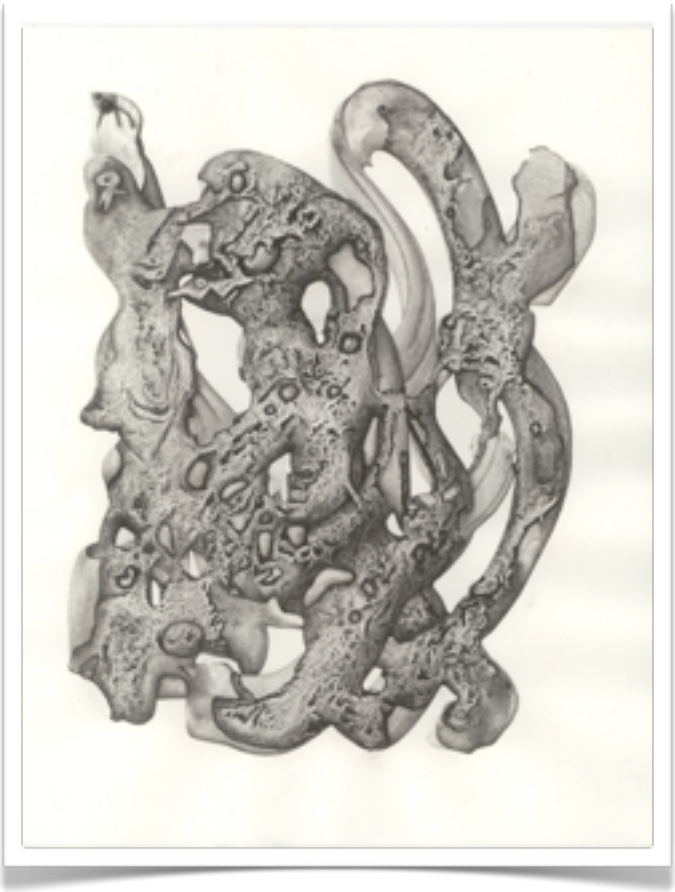
希望の塔 2007
(2007)



Time Capsule (1)
(2007)　※部分

その他の主な作品 (Web未掲載作品から)

鳥を目指す玩具 2008_10
(2008)

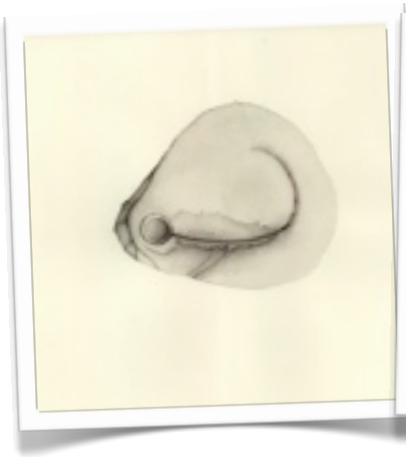


森が、壊れてゆく
(2008)

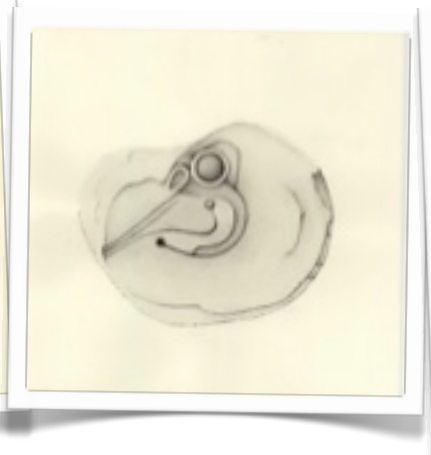
鳥の言語で
(2008)

悔しくて
(2008)

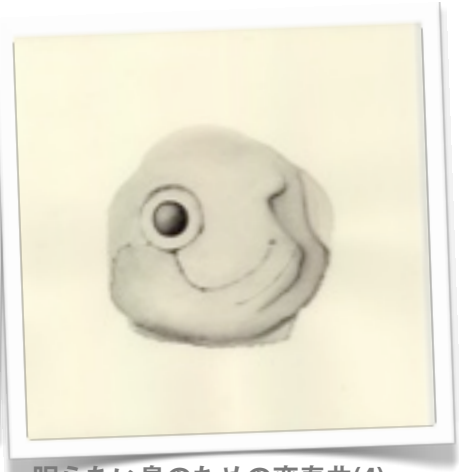
その他の主な作品 (2007年以降のWeb未掲載作品から)



眠らない鳥のための変奏曲(1)
(2008)



眠らない鳥のための変奏曲(2)
(2008)



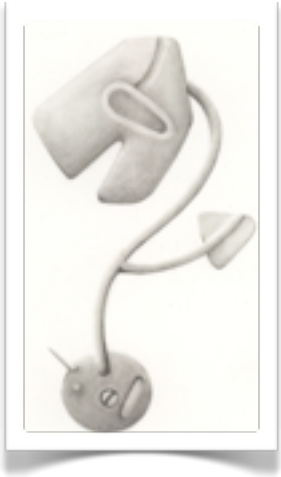
眠らない鳥のための変奏曲(4)
(2008)

ちいさな世界で：うたをうたうひと
(2008)

Radio Wave / 星への旅 2008_1
(2008)

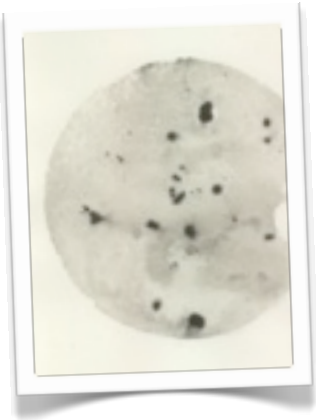
鉱石ラヂヲ(1)
(2008)

鉱石ラヂヲ(4)
(2008)



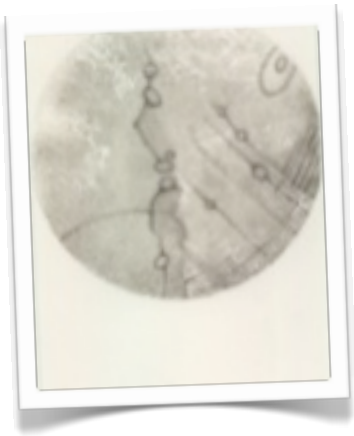
笑う花
(2008)

その他の主な作品 (2007年以降のWeb未掲載作品から)



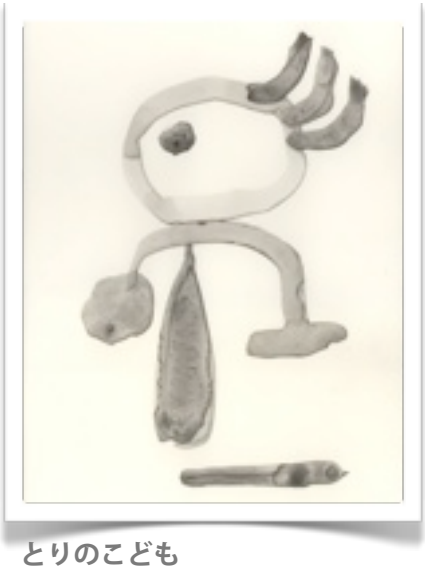
天体観測(1)
(2008)

天体観測(2)
(2008)



天体観測(1)
(2008)

オモイデの中に
(2008)

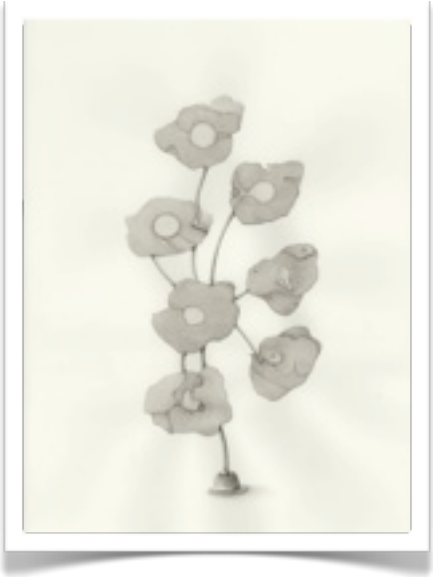


とりのこども
(2008)

鳥を目指す玩具 2008_1

月の首飾り
(2008)

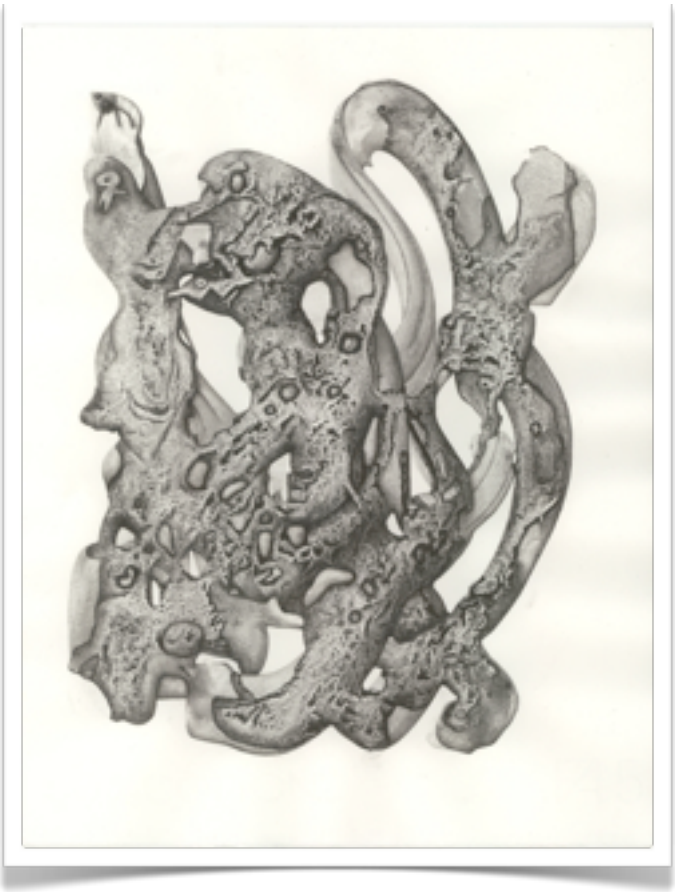
出発の日
(2008)



鋼鉄の花
(2008)

その他の主な作品 (Web未掲載作品から)

鳥を目指す玩具 2008_10
(2008)



森が、壊れてゆく
(2008)

鳥の言語で
(2008)

悔しくて
(2008)

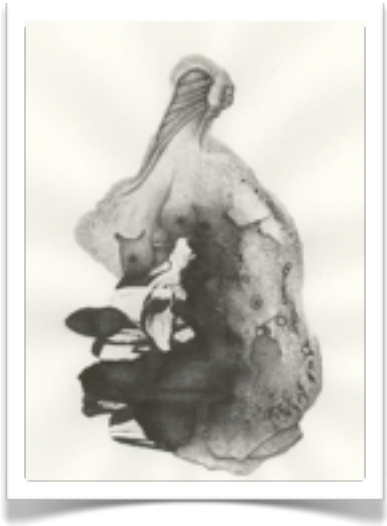
その他の主な作品 (2007年以降のWeb未掲載作品から)

ひとが、あるいたあと(04)
(2009)

ひとが、あるいたあと(05)
(2009)

ひとが、あるいたあと(06)
(2009)

ひとが、あるいたあと(07)
(2009)



枯葉の女王
(2009)

月時計
(2009)

赤方偏移
(2009)

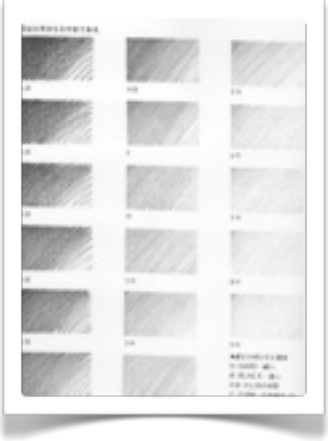
惑星からの報告(1)
(2008)

その他の主な作品 (Web未掲載作品から)

まだまだありますが、きりがないのでこの辺で..

鉛筆は鉛筆でも違う鉛筆

黒鉛中毒



鉛筆の芯には金属の「鉛」が含まれているので、なめると身体に毒だと信じているひとが結構いるようです。でも実際には、芯には「鉛」は含まれていません。だから、なめても「鉛中毒」にはなりません。

一説によれば、かつて鉛筆の品質が低かった時代、芯を湿らせると濃く書けた事から、芯をなめながら書くという習慣があったようです。これをお行儀が悪いのでたしなめる目的で、子供たちに「鉛筆の芯には毒があるからなめてはいけない」と言って教育をしたのが広まった誤解とも言われています。

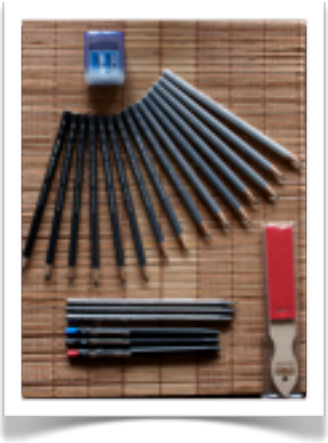
鉛筆の芯

鉛筆の芯の黒さの元は「黒鉛(Graphite)」という炭素の結晶の一種です。鉛(元素記号：Pb)とは全く異なる元素、炭素(元素記号：C)なのです。鉛筆の芯は非常に細かい「黒鉛」と「粘土」の粉を水で練り合わせたものを、芯の形に成型して焼き固める事でつくられます。

「黒鉛」には独特の結晶構造から滑性（滑りやすさ）があります。鉛筆の滑らかな書き心地は、油やワックス類などを芯の材料に混ぜている事ともに「黒鉛」そのものの性質にも由来しているのです。

「黒鉛」と「粘土」の配合比の違いによって「HB」とか「2H」とか「6B」といった鉛筆の硬度の違いが生まれます。メーカーによっては20硬度以上ものバリエーションがある製品もあります。「黒鉛」も「粘土」も天然の素材ですし、書き味と紙への定着を良くするために、各メーカーはそれぞれ独自の材料を芯に混ぜています。そのため、色みや書き心地、絵画的な効果において、それぞれ特徴が感じられます。それを追求しているうち、いつの間にか自分は結構な鉛筆コレクターになってしまいました。

様々な種類の鉛筆



現在、画材店ではいわゆる色鉛筆を始めとして、パステル鉛筆、チャコール鉛筆、カーボン鉛筆、水彩色鉛筆、そしてそれらの中間のようなものなど素材も性質も様々な鉛筆が売られています。

でも自分が使用しているのは、黒鉛ベースのいわゆる黒鉛筆だけです。
素材の異なる鉛筆を混ぜて使うと、芯の粉の性質が異なるためか、絵の世界の一体感や存在感のリアリティが失われてしまい、「ひとが描いたもの」にしか見えなくなってしまう気がするからです。

黒鉛筆のなかま

一方で自分は、黒鉛ベースのものであれば、いわゆる木軸の鉛筆の他に、φ2mm〜10mm程度の芯をはさむホルダー式の鉛筆、木部の無い芯だけの鉛筆、四角や丸などのチョーク状の形のもの、黒鉛粉なども「鉛筆」と考えています。

同じメーカーの芯でも、形状が異なると驚くほど絵画的効果は異なります。だから、芯の削り方や芯先を調える道具、また、鉛筆の持ち方にもこだわっていろいろと試しています。同じ鉛筆でも力の加わり方が変わると、大きく絵画的効果が変わるのです。

こういう事を実験している作家はあまりいないかもしれませんね。

水彩鉛筆

水彩鉛筆（水彩"色"鉛筆ではなくて）は、プロの作家でも知らないひとが多いようです。また他の画材の補助的に使われる事はあっても、それだけを大胆に使った作例を、自分はまだ観た事がありません。 水彩鉛筆も普通の黒鉛筆と素材が似ているので、（紙に完全にしみ込んでしまっていなければ） 乾いた後で消しゴムで消したり、練りゴムでトーンを調整する事が可能です。 自分は水彩鉛筆を個性を発揮できる画材として、積極的に使う事があります。

消す・ぼかす

鉛筆という画材の特徴は、描いたものを消す事ができる事です。でも僕の場合は実際は、消しゴムで完全に消す事はあまりありません。消しゴムもいろいろ試していますが、練りゴムを使って鉛筆を塗り込んだ部分をリフトしたり、トーンを調整する事の方がずっと多いようです。

また、擦筆（さっぴつ）といって、和紙をスティック状に巻いた棒状にしたものなどを使って、ぼかしたりトーンを混ぜたりする事をやる事もあります。自分は、いわゆる「タッチ」を残さないように描きますが、それは擦筆や練りゴム、あるいは黒鉛粉やチョーク型の鉛筆、水彩鉛筆を駆使していることに由来します。

以上のように、黒鉛筆でも相当な種類があり、（嫌がられなければ！）お話する事は尽きません。また、今回は触れませんでしたが、 各種の技法や 紙の種類が違えば、さらに絵画的な可能性は拡がって行きます。

多くの作家さんは鉛筆を使いますが、練習用や下書き用として使うに留まっています。それは鉛筆画家の僕にとって残念な事であると同時に、自分が探求して行けるチャンスが残っているとも感じられます。

100人編成のワーグナーのオペラが、4人組のザ・ビートルズのロックンロールよりも芸術的価値があると単純に言うことはできません。ボブ・ディランのギター弾き語りやグレン・グールドのピアノ・ソロが、必要最小限の音だけで世界をつくる事ができるように、 紙と鉛筆というミニマムな画材でも、ある世界を奏でる事は可能なはずだと、僕は考えています。

Thank You

http://homepage.mac.com/icelt/